１．＜はじめに＞

「あるじでんNo18」では、伝統的な日本の家で祀られる神々について解説しました。その中で指摘したように、家の裏側に祀られる神々は家族の私的な生活に深い関わりを持っています。

今回は、家の裏側に祀られる神々の中から荒神と納戸神を取り上げます。そして具体的事例を中心に、これらの神々と人々との関わりについて詳しく見ることにしましょう。

２．＜荒神について＞

屋内の荒神は、一般的に竪の上方に作られた棚で祀られています。ここに祀られる荒神は三宝大荒神・土荒神などと呼ばれ、火の神として信仰されているようです。竪の上以外では、囲炉裏のある部屋に棚を作って祀られたり、自在鉢や囲炉裏、あるいは五徳（火鉢や囲炉裏の中央に置き、鉄瓶や鍋などを乗せる道具）に荒神が宿っているとする地域もあります。

その名が示すように、荒神は非常に荒々しく、怒りっぽい神とされていますが、農耕の神や家族の守護神としても信仰されています。以下に、荒神の性格を示す具体的事例をいくつか示してみましょう。

○事例1

「田植えが終わると穂が良くできるように、苗を良く洗って荒神様に供える。」
（長崎県木曽寺町）

○事例2

「家族が遠出をする時には荒神様を拝み、帰ったらすぐに無事だったことを荒神様に報告する。」（長崎県平戸市）

写真1：囲炉裏と自在鉢（長崎家）

○事例3

「子供の夜泣きがひどい時には鶏の絵を書いた紙を荒神様の神棚に上下さかさまに吊り下げるとよい。」（長崎県平戸市）
あるいは「暗の夜に、鳴かねかすの声
聞けば、生ぬるさきの父を思いきしと書い
た紙を荒神様の墓に貼っておくと子供の
夜泣きが止まる。」(長崎県小倉町)

○事例4
「民の道から正月の間、園庭裏の火を絶
やすと荒神様が失われるのですので大きな
木下（前日目から正月7日まで、
園庭裏で焼却し続ける大きな木のことを
鹿児島では「火のトギ」、福岡では「火火
郎」、和歌山では「火津きどり」と言わ
います）を庭庭裏に焼いて火を絶たい
ようにしました。また歯や山へ行く時、ある
いは学校や村の外へ出かける時に園庭
裏の囲いな荒神様を押して外出した。
（長崎県嘉穂町）

○事例5
「荒神様のいない家でも、病気になかかった
時は三荒を呼ぶと治すると言われてい
る」(大阪府東部長尾町)

○事例6
「荒神様は矢の神様であるから、その方
に向かって産をする」という。
（岡山県備前市）

世田谷の荒神信仰
世田谷区内では、まだ鬼があった頃は、
その上に荒神様を祀る祠がありました。鬼
が無くなった現在でも多くの農家では、台
所の隙に棚を作って、荒神様を祀っています。
「オコジヤマは火を守ってくれる」と
か、「悪の神でヤンがワコウジンと呼ぶ」な
どと伝承されています。

荒神様はその家の人々遠の縁談を取り結
ぶため、10月30日に出雲へ送ります。この
日荒神様に、「おうさん団子」と呼ばれる団
子を36個供えるのを、荒神様には36人の
子供がいるからと説明されています。
出雲からは11月30日に帰って来ます。こ
の日もやはり「おうさん団子」と呼ばれる団
子を36個供えることになっています。用具
では団子の代わりに、ボタモチを供えてい
るようです。

留守神
旧暦10月のことを「神無月」と呼ぶこと
は全国的に知られています。一般的に、村
の神々が旧暦9月の噴湯に出雲へ送り立ち、
旧暦10月の毎日から出雲へ送って来ると言
われています。この期間は村の神々が不在
となることから、「神無月」と呼ばれている
ようです。一方、全国各地から神々が集
まる出雲では、この月のことを「神在月」
と呼んでいます。

既に述べましたように、世田谷区内では
1月過ぎの伝承として、荒神様は旧暦30日
に出雲へ送り、11月30日に帰って来ます。
しかし、地域によっては、荒神様は出雲へ
行かずに家に残すとするところもあります。
家に残る神様のことを「留守神」と言
います。留守神としては恵比寿様・大黒様が
知られています。荒神様も留守神として
家に残るする地域も多々あります。以下
に、留守神として家に残る荒神様の事例を
いくつか紹介してみましょう。

○事例7
「旧暦10月には神様が出雲へ送って行く
が、闇の神様（荒神様）だけは留守をす
る。」(山口県相島)

○事例8
「神無月の留守神は、闇の神（荒神様）と
恵比寿神である。闇の神様は36人
の子供がいて、子供を送って行かないの
ので留守番をしているという。」
（福岡県大村町）

○事例9
「オカマナマ（荒神様）には子供が23人も
いて、多すぎて出雲へ送って行けないので
という。」(福岡県宮崎市久留里町)

○事例10
「闇の（荒神様）はオカマ36名などと言われ
ているように、言結が変わって36円もの馬に
乗ってそろそろ出かけるので、「おまえが
来ては、駄がしてかなわないから」と
言われたため、駄然として行かない。」
（福岡県石垣地方）

3. 納戸神について

主人住家日の寝室として使用されていた納
戸は家の裏側に位置するため、日中はまる
す暗く、裏側の施設や出雲は対照的な居
住空間です。この納戸の中に祀られるのが
納戸神です。長崎県の対馬ではこの神様の
ことを「納戸の神様」と呼んでいますが、
地域によっては「厳神・真神様・恵比寿・大
黒・トシトコシン」など多々の神様が呼ばれ
ています。

以下に、「あらじでネア」では取り上げ
なかった納戸神の事例をいくつか紹介しま
しょう。

○事例11
「納戸の一隅に作られた棚に御写真を懸
かされたお札を貼り、祭りなどに立てる。この
棚に祀る神様が納戸神で、女の神で
あり、田の神と伝わられている。」
（長崎県）

○事例12
「旧暦2月と11月の月の日は田の神様の
祭日で、この日に餅を供えて納戸の神に
供える。納戸の神様が納戸の中に作られ
た棚に祀られていて、大黒様の祠をし
ている。納戸の神は2月に納戸から田へ
出かけ11月には田から家に帰ってくる。」
（長崎県宇土郡）

写真2：写真（長崎県豊見町のマリア様）
好まれるなどと伝承されている。
（島根県隠岐島）
ところで、納戸神として知られているものに、かれりクリシタンが祀るものがあります。次に、このかれりクリシタンの祀る納戸神について紹介します。

かれりクリシタンの納戸神

フランスシコ・ザビエルによって1549年に、キリスト教がわが国に伝えられた。キリスト教信者数は次第に増えて行き、したがって、徳川家康によって1614年にクリシタン禁制が出来られてからは、多くの殉教者が出る結果となりました。江戸時代を通じて、クリシタンへの迫害が続けられたことは良く知られています。厳しい迫害の中でクリシタン達は、表面上仏教徒を装いながらも、密にキリスト教への信仰を続けたのです。

明治6年以降、クリシタンへの弾圧が無くなったにもかかわらず、教会へ所属することなく、自分達の信仰を守り続けている人達がいます。このような潜伏状態のクリシタンは長崎県に多く存在し、かれりクリシタンと呼ばれています（江戸時代に幕府の弾圧を逃れていたクリシタンのことは潜伏クリシタンと呼ばれ、かれりクリシタンとは区別しています）。

かれりクリシタン達は家の中に仏像や神棚を設けてはいますが、納戸には「お姿」、とか「お神さま」と呼ぶクリストの聖画像やマリア観音などを祀り、崇拝しているのです。こうした崇拝者は納戸に祀られていたことから納戸神とも呼ばれています。

4. <おわりに>

伝統的な家系に祀られる家の神の中で、今回は荒神と納戸神を取り上げました。多くの事例で見たように、これらの神々は家族の私的生活（農業・家族の健康・お産・子供の夜泣きなど）に関わっています。そのため屋内の私的居住空間（台所・納戸・土間）に祀られると考えられるのです。このことはかれりクリシタン達が、自分達の神を祀る場所として納戸を選んだことからも推察することができます。

図1 かれりクリシタンの家（長崎県住月島）

現在、農家でも次第に荒神や納戸神あるいは恵比寿・大黒は祀られなくなっています。すなわち、家の表側の神様だけが残って裏側の神様がいなくなったことになります。農作物を作ることも無くなり、お座も近代的な病院で行なうようになるなど、家族生活が大きく変わったのですから、こうした家の神の変化も当然のことと言えません。

以上、私達の先祖の生活の中で家の神がどのような意味を持っていたのかを理解するために、『あずげてえNo.13』に続いて家の神を取り上げて説明しました。

区文化財研究調査員 高見 寛孝

※写真3と図1は、片岡弥吉『かれりクリシタン』（評論社刊『近世の地下信仰』昭和49年版）より転載いたします。